Japanese Association for Religious Studies

善導伝の往生相は、『浄土往生伝』の善導伝にある記述を受け継ぎ、捨身往生をしたとされている。対して、善道伝の往生相は、これとは全く異なった入寂の様子を記している。その内容を述べると、善道が二・三日前から死を予知して、にわかに軽い病気にかかり、室を閉じて、おだやかに長逝したというのであり、ここには捨身往生とは全く違った入寂の模様が記されているのである。そうなると、王古は、捨身往生をした善導と、穏やかに長逝した善道の二人を考えていたということになる。

善導伝における捨身往生説は、戒珠の説をほぼそのまま継承したものであって、戒珠と同じ善導観に立っていたことを示している。また、当時の捨身の重要性から判断しても、善導＝捨身往生者という記述は必要であったと考えられる。

ところが、王古にはもう一つの善導観がある。それが善道伝に示される前掲の伝承で、そこでは六九歳でおだやかに長逝した善道が語られている。その入寂年の永隆二年が金石文等によって傍証される点から考えて、この善道の記事は、相応の根拠に基づく資料にもとづいて書かれたものであると考える。

つまり二つの伝記を総合して考えると、王古は戒珠により明説された善導の捨身往生が一般に流布していたので、この伝承を尊重してまず善導伝を編述した。しかし他面、なお多く残存していた諸文献や金石文に基づいた善導の資料を集め、これも捨てる事ができず、あえて善道伝として別に立てたのではないだろうか。つまり『新修往生伝』の善導伝では、『浄土往生伝』より続く善導像を継続させると共に、善道伝により、『浄土往生伝』では記されていない善導の往生相等を他の資料により加えたのではないかと推定するのである。

無量寿経の浄土観

緒方義英

『無量寿経』の教説は、無量寿仏とその浄土によって「一切衆生の救済」が成立することを明らかにし、それによって他力成仏の因果を開示するものである。そこで本論は、『無量寿経』に説かれる「無量寿仏と浄土」の関係性に着眼し、その衆生済度の一端を考察するものである。

さて、無量寿仏の浄土は、一切衆生の救済を目的に荘厳されるが、それは無量寿仏自身が正覚の条件として建てた「四十八の誓願」に根拠する。法蔵（因位の無量寿仏）は、自らの国土を荘厳するにあたって、二百一十億に及ぶ諸仏の国土の中から、清浄に荘厳された仏土を覩見して、その一切の功徳を円満に成就せんと発願するのであるが、それは、師である世自在王仏が、様々な諸仏の国土について、その天人の善悪、国土の粗妙を説き、法蔵の願に応じてそれらを示現させたことに依るのである。これによって、被救済者となるべき衆生の問題性、さらにはこれから荘厳しようとしている自国（無量寿仏の国土）の課題が明らかとなり、そこに「無上殊勝の願」が超発されたのである。

願を超発した法蔵は、五劫の思惟を要して仏国土荘厳のための「清浄行」を摂取し、その願と行を「四十八の誓願」に表し

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

た。「清浄行」とは、正しく煩悩の穢れを断ち切って清浄なる仏国土を荘厳するための行であり、それはそのまま一切衆生の煩悩を転じて菩提と成す「救済の行」となるのである。

「四十八の誓願」については、一切衆生を平等に救済することに集約されるが、法蔵自身の光明・寿命を成就する願、国土を清浄に荘厳する願、国土の菩薩を教化地に至らせる願など、衆生済度に関する具体的な願行が、段階的に四十八へと展開される。そうであるから、そのすべての願が成満されるところに「浄土」は荘厳され、同時に一切の衆生が救われていく他力の仏道も完成するのである。

もとより、衆生済度の眼目は「抜苦与楽」である。四十八願では、第一に「無量寿仏の国に地獄・餓鬼・畜生の三悪道がない」こと、第二に「再び三悪道に更さない」ことが誓われ、その「抜苦」の内容が具体的に示されているのであるが、これは、被救済者の住む世界（穢土）に三悪道の苦があり、現に三悪道を廻って苦しんでいる衆生がいるから、その三悪道の原因を断ち、輪廻から解脱させようとするものである。

救済の根本をなすこれらの衆生利益は、往生後の果報として得られる利益とされているため、その功徳を無量寿仏の国土にみていくことができる。無量寿仏の国土は、因位の法蔵が清浄なる願を発し、「清浄行」を摂取して、その願行成就の上に荘厳される「浄土」であるから、国土は清浄にして煩悩の穢れなく、どこまでも我執や差別を離れて、苦しみを生起させることがないのである。反対に、煩悩の尽きない穢土では、我執や差別を離れることがなく、常に苦しみが絶えない世界となるのである。

無量寿仏の国土が清浄に荘厳されることで、他方世界の不浄性が明らかになり、その不浄なることで生起される様々な「穢土の諸問題」が浮き彫りにされてくる。これは正しく浄土の光明功徳によるところであって、浄土そのものが他方の世界を照らし、衆生の罪悪性や愚痴性を明らかにするのである。衆生の煩悩を滅するために荘厳される浄土は、常に智慧の光明として穢土を照らし、衆生を利益せんと用きかけているのである。

ここに「浄土」が、実体として存在する固定的な世界ではなく、常に穢土の衆生を照らして利益する「光明世界」（智慧のはたらき）であり、無量寿仏の衆生済度に必要不可欠な「救済の場」として荘厳されることが明らかになったのである。

吉蔵の法華経疏における仏身論
――寿量品の解釈を中心として――

藤野泰二

本稿は、嘉祥大師吉蔵（五四九―六二三）の仏身論について、『妙法蓮華経』「如来寿量品第十六」に対する注釈文を主として、「寿量品」において明らかにされるという仏身の常住が、吉蔵においてどのように理解されていたかについて考察したものである。

吉蔵は三身説の名称として『摂大乗論』（世親釈・真諦訳）の法身・応身・化身の三身の語を採用しているが、このうち応身に対する捉え方に異なりがあり、応身をどのように解釈する

NII-Electronic Library Service